

# 本当はどうなのか？

## どこまで確かめられるのか？

国語科 風間 重利

(要旨) 学校では、常日頃「最近の本校生徒は……だ。以前はこうではなかったのだが……。」ということばが教員間でよく発せられる。だが、同時にその反論として何時も言われることは「そうは言っても本当にそうなのか。昔も今とそんなに変わらなかったのではないか？」ということばである。結局、「本当にそうなのか」、「そうではないのか」を、立ち止まって確かめる暇も無く、日常生活に忙殺されながら、日々が過ぎていくというのが教員生活の現実ではないか。

今回、紀要の執筆と言う機会を得て、自分なりにこの疑問の一つについて「本当はどうなのか」を少し立ち止まって確かめる試みをしたく思う。確かめようとする問題は、「本校生徒の進路希望の中心が東京大学進学から国公立大学医学部進学に大きく傾いてきている。」という言説である。このことばは、ここ十年程の間に急激に本校内部でも外部でもほぼ定説化してきているが、一方では「そうは言っても昔から本校では国公立大学医学部志望者は多くいたので、それを今に特有の傾向というのは言い過ぎではないか」という意見も根強く残っている。この小論では過去20年余りの本校の変化について大学進学状況を通して考えてみた。

キーワード：進路希望 東京大学 国公立大学医学部

### 1. はじめに

教員個人が校内で生じている事実を「本当にそうだ」と最も強く実感するのは、自分がクラス担任や教科担任として直接かかわった生徒の観察を通してであろう。また、自分でそれらの生徒の資料をひもとき、情報を収集し、分析することが、その実感をもより強固なものにすると考え。今回、この小論を執筆する機会を得て、以前からずっと心にかかっていた「本校生徒の進路希望の中心が東京大学進学から国公立大学医学部進学に大きく傾いてきている。」という言説の論証に挑戦することにした。

方法としては、筆者がこれまで入学から卒業まで一貫して学年担任を務めた平成5年前後の4X回生、平成10年代前半の5Y回生、そして平成20年代初め

の6Z回生（本校では各学年を回生と呼ぶ習慣がある）の進路資料にその3つの回生に連続するもう一つの回生の進路資料を加えて、各々連続する2年分の卒業生の進路資料をつくり、それら3つの資料（それぞれを(A)、(B)、(C)とする)を比較・検討することによって、現在校内外で定説化してきている本校生徒の大学進学状況の変化についての言説がどれほど正しいのかを確かめることとする。

### 2. 実証の方法

卒業生の進路状況について学校に長期間保管されている情報は、指導要録および進路部が毎年まとめる進路資料のみである。今回の試みでも使用できる

客観的な資料は基本的にその二つのみである。後は、学年クラス担任、教科担任としての記憶と若干手元に残っているメモのみが頼りである。本校は1学年3クラスの小規模校で、かつ各回生の学年担任は3人で3年間原則不動である。一人の学年担任は最低でも担当回生の半数以上を一度は自分のクラス生徒として担任する。一旦担任となるとその回生の生徒の事情は大抵わかる仕組みになっている。それゆえ、担任の各生徒についての記憶や印象も今回の論証の根拠となりうると考える。

### 3. 資料から読み取れること1

(男女比および文理比の変遷)

(A)、(B)、(C)の3年時の男女数及びその比率、文理選択者数及びその比率を表すと資料編の表1のようになる。(A)と(B)・(C)の生徒総数の違いは、クラス定員40人制度が導入される以前と以後の違いである。

表1から読み取れることは、以下のとおりである。

ア (A)から(C)までの約15年間ほとんど変わらなかったことは、理科選択者が6割台の前半、文科選択者が3割台の後半にあるという文理別けの比率である。

イ (A)から(C)までの15年間で劇的な変化を起しているところは、全生徒における男女の比率の変化である。(A)では男女比3対2であったものが(C)になるとほぼ1対1へ変化している。つまり相当大きな幅で男子生徒の減少と女子生徒の増加が起こったことになる。

ウ 男女比の大幅な変化に伴い、男女の文理別け人数・比率に大きな変化が起きている。15年間で男子は理科で7.2%、文科で5.6%の減少、女子は理科で8.4%、文科で4.4%増加している。男子では理科の減少が文科の減少を上回っており、女子では理科の増加が文科の増加を上回っていることから、最も増加したのは女子理科選択者、

最も減少したのが男子理科選択者である。特に(A)から(C)への理科男子の減少(34人)と(B)から(C)への理科女子の増加(17人)は著しい。

### 4. 資料から読み取れること2

(東京大学・京都大学・国公立大学医学部進学者数およびその比率の変化)

(A)、(B)、(C)の「東京大学」、「京都大学」、「国公立大学医学部」の進学者数およびその生徒数全体に占める比率を示すと資料編の表2、表3のようになる。(なお、東京大学理科Ⅲ類・京都大学医学部進学者は各回生にいても1、2名程度なので表中では重複して数値化した。)

表2、表3からわかる特徴的なことは、以下のとおりである。

ア 東京大学進学者が(B)から(C)で男子が16人(文科7人、理科9人)、女子が7人(文科4人、理科3人)、総数で23人減少し、進学者が半分以下になっている。なかでも文科進学者が半分以下になっている。特に男子の減少幅が大きい。理科進学者がほぼ半分近くまで減少している。特に男子の減少幅が大きい。文理にわたる東京大学への男子進学者の減少が急激な下落の最大の原因である。女子の東京大学への進学者は文理ともに男子に比べて少なく、特に理科への進学者は(A)から(C)まで一貫して低い。

イ 京都大学理科への男子進学者が(A)から(B)で4分の1に落ち、(B)から(C)でも回復していない。女子の京都大学理科への進学者は東京大学理科進学者同様(A)から(C)まで一貫して低い。京都大学進学者全体が、(A)から(B)で人数・比率とも半減した最大の理由は男子進学者の急減にある。

ウ 国公立大学医学部進学者は(A)から(B)

で2人、比率で3.6%、(B)から(C)で15人、比率で6.2%と加速しながら増加している。(A)から(B)の増加の原因は、男子進学者の急増(9人・5.4%)にある。また、(B)から(C)への増加の主な原因は女子進学者の急増(女子12人・5.0%)にある。

エ 東京大学進学者と国公立大学医学部進学者の比率は(A)では15.0%と17.2%、(B)では19.1%と20.8%、(C)では9.6%と27.0%で、実は20年ほど前から数年前まで今回サンプルで取った資料に限って言えば、全て医学部進学者が東京大学進学者を上回っていた。但し、東京大学、京都大学進学者を合わせて比較すると、(A)では21.7%と17.2%、(B)では22.3%と20.8%で東京大学・京都大学進学者が国公立大学医学部進学者を上回っていたが、(C)になると東京大学・京都大学進学者を合わせた比率(13.2%)よりも国公立大学医学部進学者の比率(27.0%)が二倍強にまで膨れ上がっている。明らかに(B)と(C)の間で大逆転が生じている。

オ 東京大学、京都大学、国公立大学医学部進学者を併せた比率は(A)から(C)までほぼ4割でその比率は変化していない。

以上のような分析から「東京大学(・京都大学)進学から国公立大医学部進学へと生徒の進学希望の中心が移った」と、この頃よく校内で話されていることばは、実際の進学成績から見て、説得力を持っていることがわかる。また「そうは言っても本当にそうなのか。昔も今とそんなに変わらなかったのではないか?」という校内で囁かれている言説にも、20年前から国公立大学医学部進学者は東京大学進学者に劣らず多かったことや東京大学、京都大学、国公立大学医学部への進学者の合計人数の全生徒数に対する比率がほぼ4割で変化していないことから、それなりに根拠がある。ただし、(B)から(C)へ

の進学者数・比率の変化は、東京大学・京都大学進学者と国公立大学医学部進学者の均衡を大きく破る変化で、恐らくこの期間に本校開学以来の大変化が起こっていたことが想像される。

## 5. 卒業生の進路実績の変化についての

### 疑問とその解答仮説

表1～表3から、次のような5つの問いを作り、5つの解答仮説を立てた。

- ア どうして、(A)から(B)にかけて東京大学理科に進学する男子が急増したのか。
- イ どうして、(A)から(B)にかけて京都大学理科に進学する男子が激減したのか。
- ウ どうして、(A)から(B)にかけて国公立大学医学部に進学する男子が激増したのか。
- エ どうして、(B)から(C)にかけて東京大学理科に進学する男子が大きく減ったのか。
- オ どうして、(B)から(C)にかけて国公立大学医学部に進学する生徒が増加したのか。特に女子の激増の理由は何か。
- カ どうして、(B)から(C)にかけて東京大学文科に進学する男子が半減したのか。

仮説1 アとイの問いは恐らく連動していると想像される。(A)の東京大学、京都大学理科男子進学者を併せると10.7%、(B)のそれを併せると9.9%でほぼ似た数値になっている。このことから考えて、生徒が京都大学へ進学するよりも東京大学へ進学する方が有利と判断した結果、このような移動が起こったことが想像される。世間では京都大学の凋落(特に理科)が取り上げられたこの時代に生徒の東京大学理科人気が非常に高くなっていたことが想像される。

仮説2 またウの原因を考える時に、京都大学理科進学者の激減と連動させて考えることは難しい。なぜなら、京都大学を狙うような生徒は東京大学

や旧帝国大学理工学部に流れることがあっても、医学部に流れる率はそれほど高くないというのは今回の資料分析でも私の経験からもわかるからである。

それではなぜ、この時代に男子の医学部進学者が激増したのか。原因はやはり、東京大学・京都大学進学希望者から流れたというよりも、医学部進学の魅力が大きくなり、理工学部への進学を希望しない男子が急激に増えたからだと思われ。このような医学部進学への傾斜は、校内事情によるものというよりは、先の見えない閉塞的な我が国の近年の社会状況の中で、最も将来が約束されている堅実な進路を多くの男子が選択したことによるものと思われる。

仮説3 エの理由として第一に考えられるのは、男子理科選択者の大幅な減少である。実数で(B)から(C)で14名の減少((A)から(C)では34名の減少)が起こっている。但し、(A)から(B)でも理科選択男子数が20人も減少しているのに、東京大学理科進学者は実数で5人、比率で3%も上昇している。これは、明らかに東京大学理科に進学希望する生徒の学力レベルが(A)から(B)で上昇した、より成績優秀男子が東京大学理科に集中したことが原因と考えられる。

次に想像される理由は、国公立大学医学部人気に押されて、東京大学理科への男子の進路希望者が減少したことである。(B)の時代には東京大学理科の人気が国公立大学医学部人気と拮抗してまだ高く受験者数が(C)より相当多かったのではないかと予想される。もともと、この分野への女子の進学は少なく、男子がほぼこの分野を独占していたので、(B)から(C)にかけての女子の理科選択急増は全く東京大学理科への進学者増加につながらなかった。

仮説4 さて、オの理由としては、男子の後から少し遅れて女子の医学部への急傾斜が起こってきた

ことが想像される。この頃から、本校全生徒数における女子の比率が急激に上昇している(8%強の増加、実数では20人程度の増加)ことは先に述べたとおりであるが、女子の本校への進学急増の動機には強烈的な医学部進学希望があったことが想像される。この時代に担任を経験した者として、女子の医学部進学希望の異常なほどの強さは、非常に印象に残っている。

本校におけるここ15年間の東京大学・京都大学進学から国公立大学医学部進学への急激な傾斜の背景に、10年以上に及んで停滞し続ける現在の我が国の社会状況があることは誰も否定できないことであろう。そのような閉塞的で将来に明るい見通しが立ちにくい社会情勢の中で、まず最初に男子の国公立大医学部への傾斜が起こり、結果として生じた医学部進学実績の急速な伸びが、もともと医学部進学への強い志向を持っていた堅実派の女子の本校進学をこれまで以上に加速させ、それによってより一層の国公立大学医学部進学への傾斜が強化されたものと想像される。

仮説5 カの理由としては、まず第一に、校内における文科選択の男子数が実数として相当に減少してきていることが考えられる。(A)から(C)にかけて実数で21人、比率で5.6%も文科を選択する男子生徒が減少している。また、第二には東京大学文科進学を希望する男子の人数が(B)から(C)にかけて急激に減少したことが想像される。本校文科選択男子の学力が相対的に落ちたために東京大学文科への進学が減少したことが仮に有るとしても、この(B)から(C)への東京大学文科への進学者数の急減は大きすぎて説明がつかない。やはり、男子の中で何らかの理由で東京大学離れが起こったと想像されるのだ。

東京大学文科進学者を学科ごとに分けて整理したものが資料編の表4である。表4から読み取れる主なことは次の2点であろう。

ア (A) から (B) にかけては文Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ間での移動(文Ⅰの減少はやや大きい)は有っても進学者総数および比率は殆ど重なっている。

イ (B) から (C) にかけて進学者総数が急激に落ち込んでいる(11人減)主な理由は、男子の文Ⅰ進学者と女子文Ⅱ・Ⅲ進学者の減少による。特に男子文Ⅰ進学者の減少は激しく、(A)と比較すると5分の1以下にまで減少している。

3年生全体における文理の比率は前に示した表1から見て(A)(B)(C)ともに変わっていない。つまり(B)と(C)で文科選択者の総数は殆ど変わっていない。ただし、その文科選択者の中に占める男女数は、(B)では男子40人・女子50人、(C)では男子34人・女子53人となっている。男子が6人減少、女子が3人増加している。また(A)(男子55人・女子49人)と(C)を比較すると、(C)では男子が21人減少、女子では3人増加している。つまり、もともと東京大学文科進学者の中心は文Ⅰに進学する男子であり、男子の減少が文Ⅰ進学者の減少に直結し、女子の増加は東京大学文科進学者の増加には全くつながらなかったのだ。東京大学文科進学者の急減が、志望の変化によるものか、学力の変化によるものか、またその双方によるものかが再び問題になってくる。それを確かめるためには、各時代の生徒の進路希望がどう移り変わってきたのか検証する必要がある。

## 6. 生徒の進路希望状況分析から仮説の論証へ

ところで、指導要録には生徒の1年時から3年時の進路希望状況が記録されている。それを見ることで、各回生の進路希望の傾向がある程度は把握できる。ただし、指導要録の進路希望欄の記述が1・2年生時は大まかで「理科系学部進学希望」とか「文科系学部進学希望」というように記されている場合が多く、生徒本人から特定の大学、学部名が表明された場合に限ってその大学、学部名などを具体的に

記している。3年生時の進路希望欄ではさすがに生徒から具体的に大学、学部名などを聞き出し、それを具体的に記す場合が多い。そこで指導要録の進路希望欄の1・2年生部分の調査は大抵漠然としており、個人の進路希望を追跡する資料としては十分と言えるものではないが、進路希望全体のだいたいの動向を掴むことには支障がないと思われる。

資料編の表5～表8は、それぞれ(A)から(C)で各学年ごとの東京大学理科、国公立大学医学部、東京大学文科への進学を希望した生徒の総数を表している。各表から読み取れることは、以下のとおりである。

ア 東京大学理科への3年生時の進学希望者数およびその比率は(A)が24名(8.6%)、(B)が25名(10.4%)、(C)が28名(11.6%)で、人数においても比率においても(B)・(C)が(A)よりやや増加している。3年時に東京大学理科に進学したいと思っていた生徒は(B)、(C)でも相当数いたことが分かる。

イ 東京大学理科への3年生時の進学希望者は(A)から(C)まで共通して大きく男子に傾斜している。20年前も現在も東京大学理科への進学希望者の多くは男子だった。

ウ 国公立大学医学部への3年生時の進学希望者数およびその比率は(A)が72人(25.8%)、(B)が63人(26.1%)、(C)が89人(36.9%)で、どの時期を見ても、東大進学希望の生徒数および比率((A)が56人(20%)、(B)が51人(21.1%)、(C)が43人(17.8%))を軽く超えていた。

エ 国公立大学医学部への進学希望者の増加が特に顕著に表れているのは(C)で、その増加は男女に共通しているが、特に女子の増加率(女子6.6%、男子は4.2%)が大きい。

オ 国公立大学医学部への進学希望者は進路希望を1・2年生時から鮮明にするものが多い。また調べたところによれば1年から3年まで一貫して医

学部進学を希望し続けるものが多い。それに対して、東京大学理科への3年生時の進学希望者の殆どは、1年生時には東京大学への進学希望を明らかにしておらず、2年生でもまだ半数程度しか希望を表明していない。

カ 東京大学理科への進学を3年生時に希望する女子の比率((A) 0.7%, (B) 0.8%, (C) 2.1%)に対して、国公立大学医学部への進学を希望する女子の比率((A) 11.1%, (B) 8.3%, (C) 14.9%)はけた違いに多い。理科の女子で東京大学や京都大学に進路希望を表明するものは、医学部に進学を希望する女子に比べて遥かに少ない。

キ 東京大学文科への3年生時の進学希望者数およびその比率は、(A)から(C)にかけては男女とも減少してきており((A) 32名・11.5%, (B) 26名・10.8%, (C) 15名・6.2%), 特に男子の志望者の減少((A) 21名・7.5%, (B) 13名・5.4%, (C) 7名・2.9%)が甚だしい。その主な原因は男子の文I進学希望の減少((A) 17名・6.1%, (B) 7名・2.9%, (C) 5名・2.1%)にある。

表5～表8より読み取れる事実と先に立てた仮説1～5とを照合すると、以下のようなことが言える。

#### 仮説1の検証

今回、卒業生の進路希望状況を調べた結果、(A)の高校3年生時の東京大学理科進学希望者は男子22人、女子2人、京都大学理科進学希望者は男子18人、女子3人で、(B)の高校3年生時の東京大学理科進学希望者は男子23人、女子2人、京都大学理科進学希望者は男子5人、女子1人であった。(A)から(B)にかけて東京大学理科人気は変わっていないが、京都大学理科人気は急激に落ちている。京都大学理科進学志望者が減った割には東京大学理科進学希望者が増えていない傾向も見える。そう言うわけで、仮説1の東京大学理科人気の本校における高さは検証できたが、京都大学理科進学希望者の男子の減数が東京大学理科希望者に平行移動したのではという仮説

は全く検証できなかった。

#### 仮説2の検証

男子の国立大学医学部志望者は、(A)では41名、(B)で43名であった。この結果だけを見ると、先に立てた仮説2は当たっていないように思われる。なぜなら、男子の国公立大医学部進学希望者の全生徒に対する比率は確かに(A)では14.7%, (B)では17.8%と上昇してきているが、実数では2名しか増加していない。それなのに男子の医学部進学者が(A)から(B)で9名も増えたことが何を意味しているかは明らかである。男子の理工学部離れで医学部志望者が増加し、医学部進学者が増えたという仮説は資料からは論証できない。むしろ、医学部進学を志望する男子の学力レベルが(A)から(B)で格段に上がったことが真実であるようだ。男子医学部進学希望者に、東京大学・京都大学に届くような極めて優秀な学力レベルの生徒が集中する度合いが(A)から(B)にかけて急激に高まってきたことが、この時期の男子医学部進学者数の増加につながったと見るのが正しいのではないか。実際にこの時期、3年生の担任を務めていて国公立大医学部に成績優秀男子が集中していたことは強く印象に残っている。医学部進学希望者に成績優秀者が集中していくことは必然的に理工学系進学希望者の相対的学力低下を引き起こす。この相対的な理工学系進学希望生徒の学力低下が、その後の(B)から(C)への東京大学理科進学者激減の導火線になった可能性がきわめて高い。

#### 仮説3の検証

仮説3で(B)から(C)にかけて男子の東京大学理科進学希望者が相当数減少したのではないかと予想を立てたが、今回当時の男子東京大学理科進学希望者数を調べた結果、(B)では23人、(C)でも23人と変化していないことが分かった。東大理科に進学したいと思っていた人数は(B)、(C)ともほとんど変らなかった。にもかかわらず、実際の男子

進学者数が21人から12人にまで激減した理由は、(B)の集団と(C)の集団の学力レベルが違っていたからであろう。つまり、理科選択男子が、クラス定員の40人化、女子の激増によって実数として大幅に減少してきたことに加え、男子成績優秀者の医学部志望への急激な傾斜で、相対的に東京大学理科へ向かう男子集団の学力レベルが後退してしまっていたと思われるのである。

振り返ってみると、(A)の理科選択男子総数は122人、うち3年時に東京大学進学希望を表明したもの22人、国公立大学医学部進学希望を表明したもの41人、その他59人、それに対して(B)では理科選択男子総数102人、東京大学進学希望23人、国公立大学医学部希望43人、その他36人、(C)では理科選択男子総数88人、東京大学理科進学希望者23人、国公立大学医学部進学希望者53人、その他12人である。この数字から20年以前の(A)の理科選択男子の進学希望の多様性が浮き上がってくる。当時のごく普通に旧帝大系の理工学部へ進学を希望する男子が相当数存在していたのである。また、その中で東京大学理科進学を希望するグループは相当選抜された集団であった。それとは対照的に、ここ数年前の(C)の理科選択男子の進路希望先は、完全に国公立大学医学部と東京大学に志望が二極化し、それ以外の希望者は88人中僅かに11人に過ぎない。(A)グループから(C)グループまで東京大学理科進学希望者数は全く変わっていなかったが、その内実ががらりと変わってしまっている。

(A)から(C)にかけて、理科選択男子の実数、比率が減少し、かつ高校入学当初から強い国公立大学医学部進学希望をもった成績優秀男子が急増してきた中で、それでも男子の東京大学理科進学希望者実数が変わらなかったことに、本校の伝統、本校の進路指導の秘密がある。

今回行った(A)から(C)の各グループの1年時から3年時までの各生徒の進路希望調査によれば、

3年時に医学部進学を希望する生徒の相当数が本校入学時に既に医学部進学を希望していたことがわかった。高校入学以前から医学部進学を希望した生徒は、高校3年間その希望が変わらなかったということである。この調査結果と、(C)グループを3年間担任した経験に基づく私の実感とはピッタリ符合している。「一度医学部進学希望を口に出したものは、東京大学・京都大学の理工学部には向かわない」。実際、今回の調査で、いったん医学部進学を希望した男子が、東京大学に進学する例は皆無とってよかった。(その反対の例は多くはないが各グループ数人ずつ存在した。)それに対し、(A)から(C)のグループで1年時に東京大学理科進学希望を表明したものは殆ど存在せず、2年生でも目立った数にならず、3年時に急激に増えてくる傾向にある。つまり、東京大学理科進学希望は高校時代3年間を通してじわじわと醸成され、3年時に急速に顕在化するのである。近年の本校は、3年間の教育の中で、医学部進学を希望する多数派を除いた少数派の理科選択男子の中から、20年以前、10年以前と変わらぬ人数の東京大学理科進学希望者を育てているのである。

#### 仮説4の検証

(A)から(C)の各時代の理科選択女子の総数に占める3年時の国公立大学医学部進学希望者の人数および比率を示すと、(A)53人中31人、58%、(B)49人中20人、41%、(C)66人中36人、55%である。

次に、理科選択女子の総数に占める1年から3年までの間に医学部進学を一度でも希望した者の人数および比率を示すと、(A)53人中34人、64%、(B)49人中22人、45%、(C)66人中39人、59%である。

また、3年時の女子医学部進学希望者総数に占める実際の国公立大学医学部進学者の比率を示すと、(A)61%、(B)60%、(C)67%である。

以上のことから言えるのは、(A)から(C)まで共通して、理科選択女子に占める医学部進学希望者

率が非常に高いということである。特に (B) から (C) にかけて希望者人数が急上昇すると同時に、医学部進学率も上昇している。女子の医学部進学希望者が急増しただけでなく、その集団の学力的な質が急上昇しているのである。

以上のことから、先に立てた仮説4については、その正しさがほぼ立証されたと考える。

#### 仮説5の検証

仮説5では、(B) から (C) にかけて文科選択男子の東京大学文科進学希望者の急減を予想したが調査したところ、表7、表8に示すとおり、(A) 21人、(B) 13人、(C) 7人であった。

(A) から (C) の間 (ほぼ15年間) に男子の東京大学文科志望者の規模は3分の1にまで縮小していた。想像以上の減少であった。各時期の文科選択男子の総数は、以下のとおりであった。

(A) 55人、(B) 40人、(C) 34人。やはり、文科選択男子総数が (A) から (C) で4割、21人減少していることが、東京大学文科志望者の大幅な規模縮小と直結していることが分かる。

また、男子東京大学文科進学希望者および東京大学文科進学者数、進学率は以下のとおりであった。

(A) 希望者21人、進学者14人、進学率67%、(B) 希望者13人、進学者12人、進学率92%、(C) 希望者7人、進学者5人、進学率71%。

(A) と (C) の進学率はほぼ同じであるのに対し、(B) と (C) では進学率が20%ほど違う。どうも、(B) グループの学力レベルは (A)、(C) グループに比べて相当上回っていたことが考えられる。(B) に比較して (C) で男子東京大学文科進学希望者の学力レベルの低下が起こっていたと認めざるを得ない。その原因として最も説得力のある仮説は、男子成績優秀者が (B) から (C) で理科選択者に傾斜してきているということである。本校の東京大学、京都大学、国公立大学医学部進学者を併せた全生徒数における比率を示すと、(A) 39.1% (279人中109

人)、(B) 43.2% (241人中104人)、(C) 40.2% (241人中97人) で、ほぼ一定して4割である。この4割の進学者中の文理の比率を示すと、(A) 文科26.6%・理科73.4%、(B) 文科24.0%・理科76.0%、(C) 文科14.4%・理科85.6%である。

文科で東京大学・京都大学に進学する比率は、理科で東京大学・京都大学・国公立大学医学部に進学する比率に比べて、(A) から (C) で12%以上、約半分の規模にまで落ち込んでいる。(A) から (B) では比率に大きな変化はなかったが、(B) から (C) での落ち込みは決定的で、本校の文理のバランスがここ10年以内で、劇的な変動を起こしているのである。この数値の激変は、当時学年担任をしていた私の日々の実感とも符合しているのである。

#### 7. 最後に

今回、私は、本校の内外で語られている言説(「金大附属高校生の進路希望が東京大学進学中心から国公立大学医学部進学中心に大きく傾いてきている。」)を、自分なりの方法で調査・分析してみた。方法的には20年間の変化を、僅か6年間のサンプル調査で語るという無理を犯していることは重々承知している。僅かな時間でこの文章を仕上げるためにはやむを得なかったのである。私の意見とは違う意見もきっとあるだろう。私の調査・分析が満足なものでないことも認める。しかし、ここに記した内容は、単なるデータの調査・分析ではなく、20余年間継続して金大附属高校に勤務し、金大附属高校生と親しく接してきた教師の実感とも対応したものである。

本校の卒業生の相当数が創立以来、東京大学、京都大学をはじめとする首都圏・関西圏の大学に進学し、大学卒業後は日本の政治・経済・文化の中心で活躍し、国家の発展に貢献してきた。この伝統は、本校のアイデンティティ(天下、国家に貢献する人材の育成)と深くかかわる事実であり、在校生に

とっても教員にとっても非常な誇りである。また、多くの卒業生が医学の道に進み、地域社会に深く根付き、病に苦しむ人々を救い、支えてきたことも、本校の誇るべき伝統である。以上の二つの伝統が、開学以来絶妙のバランスを保ちながら両立してきたのが本校の歴史である。

ところが今、その開学以来の伝統、金大附属高校のアイデンティティが、社会の大きな変化の中で、厳しい試練に立たされている。創立以来の「広く世界・国家の中心で活躍し、社会の発展に寄与するリーダーの育成」を目指す教育と、「生徒の夢や希望の実現をサポートする教育活動」をどうやって矛盾することなく、調和させていくのかが今本校に問われている最も大きな課題である。

本校は今、未曾有の変化の中にある。我々は今、金沢大学附属高校の伝統の継承者として、戦慄すべき立場に立たされている。激しい変化の中にある今、我々は日々猛烈なスピードで走り続けながら、伝統の継承、金大附属高校のアイデンティティの保持について考え、行動していかなければならないのである。

資料編

(表1) 各時期の生徒総数、理科進学者総数、文科進学者総数および男女別人数及び比率

	生徒総数	男	女	理科	男	女	文科	男	女
	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)
A	279	177	102	175	122	53	104	55	49
	<b>100</b>	<b>63.4</b>	<b>36.6</b>	<b>62.7</b>	<b>43.7</b>	<b>19</b>	<b>37.3</b>	<b>19.7</b>	<b>17.6</b>
B	241	142	99	151	102	49	90	40	50
	<b>100</b>	<b>58.9</b>	<b>41.1</b>	<b>62.7</b>	<b>42.3</b>	<b>20.4</b>	<b>37.3</b>	<b>16.6</b>	<b>20.7</b>
C	241	122	119	154	88	66	87	34	53
	<b>100</b>	<b>50.6</b>	<b>49.4</b>	<b>63.9</b>	<b>36.5</b>	<b>27.4</b>	<b>36.1</b>	<b>14.1</b>	<b>22</b>

(表2) 各時期の東京大学、京都大学、国公立大学医学部進学者における男女別人数および比率

	東京大学				京都大学				国公立大医学部	
	文科		理科		文科		理科		男	女
	男	女	男	女	男	女	男	女		
(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	
A	14	10	16	2	3	2	14	0	29	19
	<b>5</b>	<b>3.6</b>	<b>5.7</b>	<b>0.7</b>	<b>1</b>	<b>0.7</b>	<b>5</b>	<b>0</b>	<b>10.4</b>	<b>6.8</b>
B	12	9	21	4	2	2	3	1	38	12
	<b>5</b>	<b>3.7</b>	<b>8.7</b>	<b>1.7</b>	<b>0.8</b>	<b>0.8</b>	<b>1.2</b>	<b>0.4</b>	<b>15.8</b>	<b>5</b>
C	5	5	12	1	1	3	2	3	41	24
	<b>2.1</b>	<b>2.1</b>	<b>5</b>	<b>0.4</b>	<b>0.4</b>	<b>1.2</b>	<b>0.8</b>	<b>1.2</b>	<b>17</b>	<b>10</b>

(表3) 各時期の東京大学、京都大学、国公立大学医学部進学者における文理別人数および比率

	東京大学			京都大学			東京・京都大合計	国公立大医学部	合計
	文科	理科	合計	文科	理科	合計			
(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	
A	24	18	42	5	14	19	61	48	109
	<b>8.6</b>	<b>6.4</b>	<b>15</b>	<b>1.7</b>	<b>5</b>	<b>6.7</b>	<b>21.7</b>	<b>17.2</b>	<b>38.9</b>
B	21	25	46	4	4	8	54	50	104
	<b>8.7</b>	<b>10.4</b>	<b>19.1</b>	<b>1.6</b>	<b>1.6</b>	<b>3.2</b>	<b>22.3</b>	<b>20.8</b>	<b>43.1</b>
C	10	13	23	4	5	9	32	65	97
	<b>4.2</b>	<b>5.4</b>	<b>9.6</b>	<b>1.6</b>	<b>2</b>	<b>3.6</b>	<b>13.2</b>	<b>27</b>	<b>40.2</b>

(表4) 各時期の東京大学文科への進学者の学部別・男女別人数および比率

	文科Ⅰ		文科Ⅱ		文科Ⅲ		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)	(人)(%)
A	11	3	1	1	2	6	14	10
	<b>3.9</b>	<b>1.1</b>	<b>0.4</b>	<b>0.4</b>	<b>0.2</b>	<b>2.2</b>	<b>5</b>	<b>3.6</b>
B	6	0	2	4	4	5	12	9
	<b>2.5</b>	<b>0</b>	<b>0.8</b>	<b>1.7</b>	<b>1.7</b>	<b>2.1</b>	<b>5</b>	<b>3.7</b>
C	2	2	1	0	2	3	5	5
	<b>0.8</b>	<b>0.8</b>	<b>0.4</b>	<b>0</b>	<b>0.8</b>	<b>1.2</b>	<b>2.1</b>	<b>2.1</b>

(表5) 各時期の東京大学理科への進学希望者の男女別人数および比率

	1年			2年			3年		
	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)
A	3 1.1	0 0	0 1.1	10 3.6	0 0	10 3.6	22 7.9	2 0.7	24 8.6
B	0 0	0 0	0 0	3 1.2	1 0.4	4 1.6	23 9.5	2 0.8	25 10.3
C	3 1.2	2 0.8	5 2	16 6.6	8 3.3	24 9.9	23 9.5	5 2.1	28 11.6

(表6) 各時期の国公立大学医学部進学への進学希望者の男女別人数および比率

	1年			2年			3年		
	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)
A	20 7.2	15 5.4	35 12.6	27 9.7	16 5.7	43 15.4	41 14.7	31 11.1	72 25.8
B	18 7.5	7 2.9	25 10.4	32 13.3	15 6.2	47 19.5	43 17.8	20 8.3	63 26.1
C	36 14.9	24 10	60 24.9	50 20.7	33 13.7	83 34.4	53 22	36 14.9	89 36.9

(表7) 各時期の東京大学文科への進学希望者の学年別、男女別人数および比率

	1年			2年			3年		
	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)
A	5 1.8	0 0	5 1.8	10 3.6	7 2.5	17 6.1	21 7.5	11 2.5	32 11.5
B	0 0	0 0	0 0	1 0.4	4 1.7	5 2.1	13 5.4	13 5.4	26 10.8
C	2 0.8	3 1.2	5 2	7 2.9	12 5	19 7.9	7 2.9	8 3.3	15 6.2

(表8) 各時期の東京大学文科への進学希望者の学部別、男女別人数および比率

	文科I		文科II		文科III		合計		
	男 (人)(%)	女 (人)(%)	男 (人)(%)	女 (人)(%)	男 (人)(%)	女 (人)(%)	男 (人)(%)	女 (人)(%)	合計 (人)(%)
A	17 6.1	3 1.1	1 0.4	1 0.4	3 1.1	7 2.5	21 7.5	11 3.9	32 11.5
B	7 2.9	4 1.7	2 0.8	3 1.2	4 1.7	6 2.5	13 5.4	13 5.4	26 10.8
C	5 2.1	2 0.8	1 0.4	1 0.4	1 0.4	5 2.1	7 2.9	8 3.3	15 6.2